宮崎兄弟資料館だより

第11号　2020/3/31

荒尾市宮崎兄弟資料館・シンガポール晩晴園 共同報告書発刊記念イベント 「宮崎兄弟と孫文の遺産」開催

令和元年9月1日、荒尾総合文化センター・小ホールでシンガポール孫中山南洋紀念館・晩晴園と共同報告書発刊を記念するイベントを開催しました。荒尾市と晩晴園は、平成26年9月に「荒尾市宮崎兄弟資料館・晩晴園両館提携についての基本協定書」を締結して以降、5年間にわたって学術研究をメインに交流を重ねてきました。令和元年7月には、この学術交流の成果として共同報告書「日本からシンガポールへ–宮崎兄弟と孫文と辛亥革命–」を発刊するに至り、今回のイベントではその内容について紹介するとともに、これらの歴史遺産をどのようにまちとして活かしていくことができるのかをシンポジウムで語り合いました。

オープニングセレモニー

▲孫中山南洋紀念館理事のリー氏による挨拶

シンポジウム

▲（上段左から）野田（荒尾市執筆者）、姜尚中氏、クァ孫中山南洋紀念館学術顧問、タン国家文物局副局長

シンポジウム「宮崎兄弟と孫文の友情の歴史をもとに地域の可能性を考える」には、シンガポールから共同報告書の執筆者であるクァ先生（孫中山南洋紀念館学術顧問）をはじめ、日本近代史の大家・猪飼隆明氏（大阪大学名誉教授、元荒尾市史編集委員長）や政治学・政治思想史を中心に多方面で活躍する姜尚中氏（熊本県立劇場館長）も出演し、それぞれの立場から、改めて宮崎兄弟と孫文の友情の歴史的価値、そして現代的価値について語っていただきました。

ペープサート

▲6年生手作りの紙人形劇

和太鼓演奏

▲心臓に響くほどの和太鼓熱演

続く、荒尾第一小学校の6年生によるペープサート「宮崎兄弟と孫文の友情ものがたり」では、滔天や孫文らの交流史を簡潔に分かりやすく紹介してもらい、さらに荒尾太鼓による滔天の生涯をイメージした和太鼓演奏が披露されると会場の雰囲気は一気に盛り上がりました。

荒尾市・シンガポール国家文物局
提携についての基本合意書　調印

発刊記念イベントのフィナーレでは、荒尾市とシンガポール国家文物局による基本合意書の調印式も行いました。荒尾市とシンガポール国家文物局は、これまでの宮崎兄弟資料館と晩晴園との施設間交流を礎に、学術交流の成果である共同報告書の普及・活用を図りながら、青少年交流等において密に協力を行うことで合意しました。今後は、宮崎兄弟と孫文の友情の歴史をもとに、次世代を担う子どもたちに国を超えた交流を行う機会を提供し、世界の発展と平和への貢献をめざします。

（左）タンシンガポール国家文物局副局長（右）浅田市長

荒尾での発刊記念イベント開催の一週間後、晩晴園で「中秋節」の一大イベントが開催されました。国会議員をはじめとする重鎮たちも参加するこのイベントで、共同報告書についての講演会を開催させていただきました。参加者からは、宮崎兄弟とシンガポールとの関係についての質問が出るなど、宮崎兄弟についてシンガポールの人々に広く知っていただく機会となりました。

▲晩晴園での共同報告書講演会のようす

第31回孫中山・宋慶齢紀念地連席会議に出席しました

令和元年8月9日～10日、荒尾市は世界中の孫文記念館が一堂に集う「孫中山・宋慶齢紀念地連席会議」に今年も参加しました。

今会議では、文化資源をどのように活かすのか、特に観光面等での活用事例について、参加施設42施設のうち6施設から研究報告が行われ、荒尾市も「『地域資源』としての宮崎兄弟と孫文」と題し報告を行い、関係施設との交流を深めました。

☆荒尾市宮崎兄弟顕彰基金への寄附のお願い☆

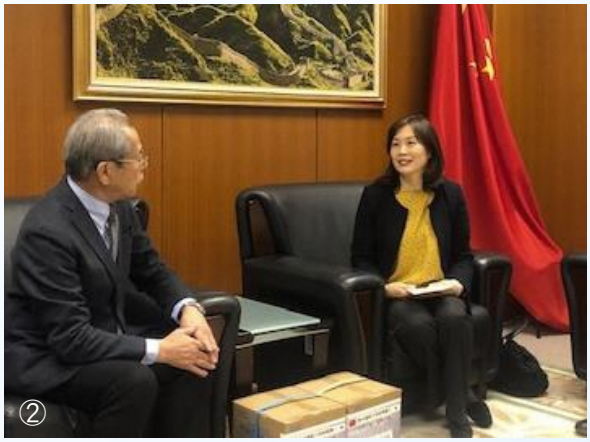
荒尾市では「荒尾市宮崎兄弟顕彰基金」を設置し、**宮崎兄弟の生家施設の維持管理**や、**宮崎兄弟の顕彰事業**に活用しています。世界に誇ることができる荒尾の偉人の歴史を次代に継承していくため、寄附にご協力をお願いいたします。

中国と荒尾市との揺るぎない絆
―宮崎兄弟と孫文　受け継がれる友情の歴史―

令和2年2月7日、荒尾市は中国の武漢市に医療用プラスチック手袋を支援物資として送るため、中国駐福岡総領事館を訪問しました。

中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス関連肺炎は瞬く間に拡大し、今なお世界中で不安や危機感がいている状態です。武漢市には、宮崎兄弟と深い友情で結ばれた孫文の顕彰施設であり、荒尾市と同じく「孫中山・宋慶齢紀念地連席会議」のメンバーでもある「湖北省辛亥革命武昌起義紀念館」「武漢辛亥革命紀念館」「武漢市中山艦博物館」の3館があります。荒尾市は平成24年以降、この3館と会議を通じて毎年交流を続けてきました。

こうした中での新型コロナウイルスの感染拡大―「宮崎兄弟が生きていたら、必ず中国の友人のために出来ることをしようと奔走したはず」との思いから、中国駐福岡総領事館の協力のもと、武漢市へ医療用プラスチック手袋を送ることが急遽決定しました。国債の医療機関等に支障が生じないように、県内の各業者に在庫等を問い合わせ、同時に中国駐福岡総領事館にも相談させていただいた結果、医療物資が著しく不足していることが分かりました。その結果、医療用プラスチック手袋2万6千枚を集め、中国駐福岡総領事館を通じて武漢市へ送ることとしました。



①支援物資を積み込む浅田市長たち
②中国駐福岡総領事館での田上副市長（左）と康副総領事（右）

①浅田市長を表敬する康副総領事一行〔左から、田上副市長、浅田市長、康副総領事、房日本九州華僑華人青年会副会長、兪秘書、劉アタッシェ〕
②「友情の梅」の木の前で記念撮影

その後、日本国内でも新型コロナウイルスの感染が拡大。マスクやアルコール消毒液の品不足が続き、3月5日には有明保健所管内でも感染者が確認されるなど、荒尾市内でも危機感が増していた3月6日、今度は中国駐福岡総領事館から使い捨てマスク900枚とアルコール消毒液等50リットルが届けられました。これらは中国駐福岡総領事館と日本九州華僑華人青年会、九州中資企業協会の呼びかけで集められたもので、箱には中国語で「ともに困難を乗り越えよう」との文字が記されていました。

物資を届けに来て下さった康暁雷副総領事は、今や新型コロナウイルスは世界共通の課題であることに言及され、「荒尾市からのいち早い中国への支援に感動しました。一日も早い終息のため、手を携えていきましょう。困難にあるときだからこそ、隣国である日中が互いに助け合っていきましょう。」と語られました。

いただいたマスクは、市内小中学校の卒業式で卒業生が使用しました。110年ほども前に築かれた友情をもとに、中国と荒尾市はさらに絆を強くしています。

友情の歴史、今なお―中国、台湾などから来館―

今年も、宮崎兄弟と孫文の友情の歴史をたどって、中国や台湾を中心に外国から多くの方に来館いただきました。時には、個人で訪ねて来られる方もあり、友情の歴史が世界と荒尾をつないでくれていることを強く感じます。

夏には、香港から大学生たち10名程度が日本への研修の一環として来館。その経緯を尋ねると、以前荒尾にも来て下さった香港中華総商会名誉会長のジョナサン・チョイ氏が「日本に行くならば、必ず宮崎兄弟の生家を訪れるように」と提言してくださったとのこと。また、冬には、台湾各地で太鼓に携わっている総勢33名の方が来館され、台湾の国立国父紀念館（国父＝孫文）にまで話が及び、「ここに来て、ようやく歴史と今がつながった」と、大変感動して帰られました。

近年は、「総合的な学習」の時間で郷土学習として市内の小中学校にも見学に来てもらうなど、宮崎兄弟の生家施設は今、荒尾市の国際交流の拠点、また郷土学習の拠点ともなっています。

①香港から訪れた大学生たちと記念撮影
②熱心に解説を聞く台湾の太鼓奏者たち

孫文ゆかりの地・山口を視察

―令和元年度　荒尾市日中友好促進会議視察事業―

宮崎兄弟と孫文の関係をきっかけとして、「日本、中国両国民の子々孫々に至る友好を促進し、両国の繁栄と世界平和に貢献することを目的」に、昭和55（1980）年から活動を続けている荒尾市日中友好促進会議は、令和元年10月19日に、孫文ゆかりの地である山口下関市を訪問しました。あまり広くは知られていないですが、山口には、革命運動を支援をした実業家・田中隆（1866-1935）に孫文が返礼として贈った古代ハスが咲く「長府庭園」があり、また孫文が自伝「志有れば竟になる」で特に資金面で協力してくれた人物として名を挙げている実業家・政治家の久原房之介（1869-1965）の出身地であるなど、様々なゆかりがあります。

また、清王朝の政治家であり、孫文と敵対した李鴻章（1823-1901）は、日清戦争の講和条約締結の際、全権大使として下関に来ており、その際に使用された調度品や関連の品々が展示される日清講和記念館も訪問しました。

さらに、荒尾市で今「日中友好の朝顔」として市内小中学校で育ててもらっている朝顔の持ち主であった愛新覚羅溥傑・浩夫妻を祀る愛新覚羅社もあり、日中関係史についての見識を深めました。

①「孫文蓮」が咲く長府庭園
②愛新覚羅社がある中山神社本殿前にて記念撮影
③日清講和記念館を拝観

生家だより　Ｎｏ．１１

・4/20（土）　牡丹茶会

今年も、宮崎兄弟の生家の庭には、ピンクの綺麗な牡丹の花がたくさん咲きました。中国総領事館から寄贈された赤の牡丹をはじめ、濃い紫や淡いピンク、白の牡丹も次々と咲き、茶会当日はぽかぽか陽気で、多くの方に目だけでなく味覚的にも、春を満喫していただきました。

今年のお菓子は、「お菓子の香梅」さんの練切り「牡丹」

・4/9（火）～5/12（日）　第６回牡丹文芸・美術展

宮崎兄弟の生家施設で育てている牡丹をテーマにした作品を展示する牡丹文芸・美術展を今年も宮崎兄弟の生家で開催しました。一般から応募を募り、今年は全37点の俳句・絵画・押花作品が寄せられました。

・6/1（土）～6/2（日）　いけばな展

これまで毎年3月下旬に開催されてきたいけばな展ですが、今年度は初夏の時期に開催しました。春とは違う青紅葉やカラー、アジサイ、ひまわりといった花々が花材となりました。イベント当日は穏やかな天候で、爽やかな初夏の風が宮崎兄弟の生家に吹きました。

・9/29（土）　第13回 音と光の祭典

今年の音と光の祭典は、昨年に引き続き、台風接近のため、宮崎兄弟の生家施設ではなく、荒尾第一小学校の体育館で行われました。テーマ「『自由と平等』現代（いま）に活かそう、宮崎兄弟の精神を！」をもとに、毎年恒例となった荒尾第一小学校の6年生の子どもたちによるペープサート（紙人形劇）や海陽中の吹奏楽部によるステージで会場は盛り上がっていました。

また今年は、福岡大学の山崎教授と松永所長によるトークセッションも企画されました。宮崎滔天という人物の魅力を形成しているその光と影の両面について討論しました。

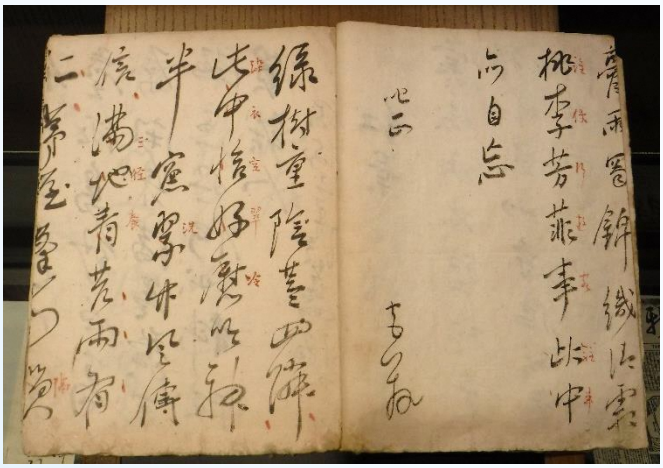
トークセッションのようす
（左）松永所長、（右）山崎教授

資料紹介⑩

八郎自筆の詩文草稿（江戸時代末）

八郎の漢詩に荒尾出身の実学派・月田蒙斎（1807-1866）が朱書きで添削を入れている。各所に「叱正*宮八拝」と書かれており、八郎が師である蒙斎に批正を求めたことが分かる。八郎の漢詩の評価は高く、「立志ノ歌」や「読民約論」、「東洋の危機」などは当時の多くの若者の心を打ったと伝えられている。

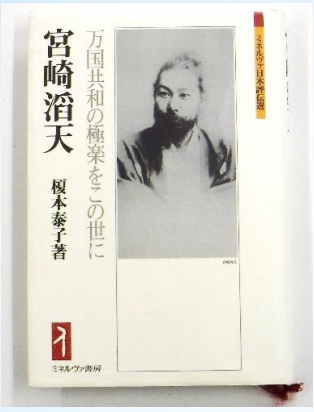
＊他人に詩文等の訂正・添削を求めるときにへりくだっていうことば



書籍紹介③

榎本泰子
『宮崎滔天―万国共和の極楽をこの世に―』
（2013年、ミネルヴァ日本評伝選）

宮崎滔天の思想と行動について、彼の著作から多く引用しながら概説されているため非常に読みやすく、滔天の人物像を簡潔に知ることができる書と言える。著者の専門分野である中国近代文化史・比較文化という点から、革命を支援した日本人としてだけでなく、滔天の浪曲師や著述家としての業績にも着目して記されており、著者自身が語るように、「宮崎滔天と孫文を国境を越えた同志としてとらえ、激動の時代を生きた人間ドラマとして描」いた一書である。



宮崎兄弟の生家スケジュール（令和2年度）

・牡丹茶会（4月12日、お呈茶：荒尾海陽中学校　茶道部）

※4月上旬頃、牡丹開花

・初夏のいけばな展（5月16～17日）

※5月末～6月頭　菩提樹開花

※お盆開館（8月11日）

・音と光の祭典（9月26日）

・企画展「荒尾市・シンガポール青少年国際交流推進事業　成果報告」（10月下旬～3月末）

・荒尾市日中友好促進会議設立40周年記念イベントin宮崎兄弟生家（10月下旬頃）

・JR九州ウォーキング（11月3日）

・滔天忌俳句大会（12月6日）

・文化財防火デー「防火訓練」（1月26日）

※イベント詳細は宮崎兄弟資料館HPをご覧ください。

※開花時期については、前後することがございます。詳細については荒尾市文化企画課（☎0968-63-1274）までお問合せください。

～次号予告～

次回の「宮崎兄弟資料館・館報」12号は、**2021（令和3）年3月**に発行予定です。
内容は、
（1）生家だより　No.12
（2）資料紹介⑪
（3）書籍紹介④
を予定しております。その他、掲載内容についてご意見・ご要望があれば、下記メールアドレスまでお寄せください。
E-mail：culture@city.arao.lg.jp（荒尾市文化企画課世界遺産・文化交流室）

～編集後記～

今年度は、シンガポール・晩晴園との5年間にわたる交流の集大成・共同報告書の発刊、それを記念するイベントの両地開催、そして荒尾市とシンガポール国家文物局との基本合意書調印と、宮崎兄弟と孫文の友情の歴史が今に息づくものであることを強く感じさせられる一年となりました。歴史は決して過ぎ去ったものではなく、今を生きる私たちに様々な示唆を与えてくれるもので、宮崎兄弟の生き様はその代表例とも言えるのではないでしょうか。宮崎兄弟に関連する事業も拡大してきており、「地域資源」としての価値がこれから多方面で発揮されるのではないかと期待しているところです。また誠に勝手ながら、本年度より「資料館だより」を年一回の発行とさせていただきました。何卒ご容赦いただき、今後もHPを含め宮崎兄弟関連事業についての情報発信に努めてまいりますので、ご注目いただければ幸いです。